けて之を防ぎ、成實、景綱をして之を守らしむ、偶會津の將長沼上總百餘人を率ゐて、其柵の近傍を過ぎ窪田に往く、成實之を見、景綱と謀り、片倉藤左衞門をして二百の兵を以て之を追はしむ、然れとも敵を窮追するを戒しむ、藤左乃ち命を承け擊ちて之を走らせ、勢に乘じて北ぐるを追ふ、佐竹會津の大兵、之を見て赴き援ひ、藤左を圍む、成實等又兵を發して之を救ひ、互に兵加はり戰漸く激烈となる、政宗遂に麾下を率ゐて大に戰ひ、苦戰數合、伊東重信之に死せり、于時七月四日なり、雌雄未だ決せず、互に退きて相持し八月に至る、

盛國父子の不和

同年七月十四日、猪苗代盛國父子、金、曲耶麻郡に戰ふ、先きに盛國家を子盛胤に讓り、猪城の北鶴峯に隱居す、然るに家臣等盛胤に事へ來て已れに奉せざるを怒り、一說に淫奔なる母ありて、盛胤を讒せるに依るとあり、盛胤を除かんと謀り、其の黑川に登城して虛なるに乘じ、猪城に入る、盛胤歸り入るとを得ずして橫澤安積郡に走る、已にして船を艤して湖を渡り、金、曲の壘を襲ふ、金、曲には、常に大堀土佐、秋屋平右衞門等、壺下口の警備として茲に居りしが、是に於て、戰ひ敗れ猪苗代に至る、盛國之れを聞き、矢內八郎、廣瀨藤內、遠藤太郎等を遣はして之れを討たしむ、盛胤之を逆擊す、盛國遂に自ら兵を率ゐて赴き援ふ、是に於て、義廣其私鬪を怒り、父子を貶謫する數日、之を免せり、後盛國政宗に應して蘆名の宗社を覆したるも、實に之に源因せり、

會津伊達和す

同年八月、岩城常隆、伊達、蘆名の兩氏、相持して兵未た解けざるを憂ひ、石川昭光と議し、白土攝津を佐竹蘆名の二氏に、志賀閑齋を伊達氏に遣はし、說て曰く、親戚相戰ふ外侮恥つべし、和するに若かず、と切に兩間に周旋し、遂に和成る、因て同月十六日、郡山に於て其式調ひ、兩家の兵戍を解き、各領所に就けり、

伊達岩城兵を梯ふ

同十七年三月十日、政宗密かに使を遣はして、岩城常隆の臣竹貫參河を招く、參河陽はに之を諾し、陰かに常隆に告ぐ、常隆乃ち兵を出して鄕田、原田、鹿股の諸城を攻めて之を陷れ、進んで清顯が一族、田村右馬の守れる新町城を攻め田村郡を畧せんとす、是に於て、政宗、岩城氏の田村を窺ふを患へ、之を伐たんと欲す、然れども會津の後援あるを恐れ、遂に成實の言を用ゐ、書を裁して片平重綱を招き、其領内の要衝を扼して、會津岩城の通路を絶たしむ、

片平叛す

重綱之を諾し、遂に伊達に降れり、初め蘆名盛興の庶子に力丸と云ふものあり、母は片平が女にして、懷妊の初め本妻の妬をさけ、片平に往きて力丸を生む、後盛興卒して嫡子なかりしかば、片平力丸を世に出して其嗣となさしめんと欲せしに、老臣等盛興の父盛氏と謀り、二階堂盛隆を養子とせしを以て、其志を果す能はず、後亦盛隆卒し、其子龜王も早世せしかば、片平今度こそ力丸の世に出つべき時來れりと思ひしに、亦案に相違し、佐竹義廣を迎へて嗣となせり、之を以て常に憤懣に堪へず、遂に蘆名氏に叛するに至れりと云ふ、後力丸は母と共に民間に匿れ、紀氏の家に長じ、浦生氏の世神職となり、盛興の盛と紀氏の紀とを取り、盛紀氏と稱し、後紀字を省けり、

政宗仙道に出陣す

同年四月朔、政宗、會津岩城を討たんと米澤を發せしが、病に罹り

義廣片平

板屋に滯留し、同廿三日大森に到る、時に片平重綱來り謁す、五月三日本宮城に入り、同四日安積郡阿子嶋城を攻む、城主治部戰破れて猪苗代に走る、翌日政宗高玉城を圍む、城主義直（太郎左衛門と云ふ）防戰して利なく、子女を刺して自殺す、城中一士あり荒井杢丞と云ふ、出て、敵將羽田實景と槍を挺して相鬪ふ、勝敗未た決せず、敵兵簇集二人を遮る、杢丞實景を舍て去て城に入り遂に自殺せり、是より先き、杢丞、治部、義直と共に、二本松畠山氏に仕へし事あり、昨阿子島の戰に奮鬪せしが、城中利を失ひ出て、高玉に留まりしなり、其阿子嶋を出つるや、左右に謂て曰く、吾命三あり、一は今日治部の爲に死せり、一は明日義直の爲に死なん、左右曰く、其他の一命を致一は如何、曰く、吾二本松にありて城陷るの日、既に他の一命を致せり、と是に至りて其言を食まず、

義廣政宗の和を破り、我領内を侵し、片平已に敵地となれりと聞

の質を礫す

き、大に怒り、先つ重綱の質を城外に礫し、自ら兵を率ゐて出でゝ政宗を防ぐ、時に岩城常隆、佐竹義重、相馬義胤の諸氏、合して田村の諸城を侵し、勢甚た猖獗なり、因て政宗、成實、景綱をして之を防がしめ、同十八日自ら大森に歸り、相馬の附城駒峯を拔き、又新地、谷地の諸城を取る、是に於て、相馬の中村城（相馬氏の本城）危急なり、義胤之を聞き、急に田村より師を班せり、已にして義廣、佐竹、岩城等と約して、岩瀨郡に入り、將に政宗の侵地を奪ひ、安積安達に進まんとす、

盛國政宗に降る

同年六月朔、政宗密かに成實、景綱を猪苗代に遣はして、盛國を招く、盛國亦前議の三ヶ條を約して之に應じ子の龜丸（年十三）從者須賀野左馬助を出して質となし、以て渝らざるを誓ふ、是より先き、義廣、高玉、阿子島、敵地となりたるを以て、精兵二百餘を湖岸壹下（耶麻郡）に遣はし、仙道の不慮に備へしが、是に於て、盛國之を給て曰

盛國奸計

義廣歸城政宗猪苗代を援ふ

く、主義廣已に黑川に歸り、余をして此所を代り守らしむ、と成兵皆黑川に歸り、始めて其伴りなるを知り、盛國の二心あるを疑ふ、義廣其報を聞き、同四日馳せて國に就く、

政宗亦義廣の會津に回ると聞き、猪苗代を屠られんとを恐れ、赴き援はんとす、政宗の左右、深く敵地に進入するの危險なるを以て、之を諫止す、政宗聽かず、左右、亦阿子嶋以内に進むの不利なるを說て止まず、政宗已を得ずして布施備後を猪苗代に遣はし、將に赴き援はんと告ぐ、時に猪苗代城、成實、景綱あり、兵甚た寡しと雖とも之に對て曰く、義廣師を班すと雖とも、何ぞ公の進軍を煩らはさん、若し公來るか、佐竹氏其虛に乘じ、本宮等の要所を襲はん、公は宜しく阿子嶋に止まり陣せらるべし、阿子嶋は猪苗代本宮の間にありて各數里を距るのみ、何れに變あるも往きて、之を援ふ難きにあらず、と備後を還へす、政宗豫め此事あるを知り、備

明治戊辰官軍の會津を攻むるや四方嘗險且備固く一歩も其境を踰ゆる能はず然るに最險を恃み備薄き石筵口を破り突入長廰逐に四方を守るものをして顧みる所あらしめ大兵續進全く城を圍むに至れり之れ政宗の侵入と同一の運動

政宗猪苗代に入る

義廣政宗を拒ぐ

後を途に要して、成實等の傳言を翻へさしめ、事急なり公速に來り援へ、と謂はしめ、而して其の來書を展かずして左右を顧みて曰く、使者の言此の如し、吾親ら往かざるべからず、と原田左馬介をして、下長井の兵を最上の境に伏せて、米澤の虛に備へ、別に上長井の兵を率ゐて槍原口より、會津を襲はしめ、已れは即夜十七騎を從へて先つ發し、石筵口より山を攀ぢ谷を越え猪苗代に往く、各地の諸軍之を聞き、壷下を過ぎて繼ぎ至る、成實、景綱、遑遽出てゝ之を酸川野に迎へ城に入る、政宗乃ち盛國を見て速に應ぜるを謝し、且其質を返し、共に黑川城を攻めんことを謀る、已にして義廣之を聞き、兵七千餘を帥ゐ分ちて十二隊となし、四日夜富田將監將盛は富田美作が嫡子にして、耶摩郡塚原館に住す、享年二十有一、を先鋒として、高森山に陣せしめ、自ら中軍を率ゐて磨上原に出つ、政宗も亦八ヶ森に軍し、兵を六隊に分ち、盛國を以て先鋒となし、景綱、成實、及び白石若狹之に繼げり、

磨上原合戰

六月五日、將監進んで湯田澤に至る、盛國も亦進んで將監と吹渡に遇ひ、戰端を開く、將監擊て盛國か軍を破り、勢に乘じて追擊し、二陣の景綱をも破りたり、政宗之を見我が降將太郎丸掃部をして銃手二百を以て之を援はしめ、側面より連發せしむ、將監常に掃部が不忠を惡みしかば、誅戮を加ふはこの時なり、と亦之に應じ、砲聲天地を轟かし、硝煙曚々咫尺を辨せず、將監敵勢の少く挫折するの色あるを見るや、機失ふ可らずと、兵を麾して硝烟彈雨の中を衝き、突擊奮進、掃部が全隊を駈け散らす、掃部身を以て脫し、一騎東方を指して遁る、將監之を見好敵なりと、追ふて掃部と馬上相搏して優つ、將監の臣七宮杢之助、其首を斬る、義廣將に敵の全軍を敗らんとす、時に成實、若狹と共に、磐梯山麓を回り、間道より馳せて我軍の背後に出て、旗を七森に建て叫喊して進む、適

西風變して東風となり、砂塵を卷きて咫尺を辨せず、我兵驚き以て反者ありとなし、相顧みて潰ゆ、景綱等兵を麾し之に乘じて迫れり、義廣大に怒り、乃ち麾下の兵四百騎を率ゐて直ちに八森に向ひ、政宗の中堅を衝く、接戰六七合、遂に衆寡敵せず、騎卒多く戰死す、義廣猶去らず、蘆名の存亡此一戰にありと、自ら敵中に突入して決戰せしが、從騎の諫止する所となり、三十騎と身を脫して黑川に退く、政宗追ふて又之を磨上原の北方に破れり、金上盛備、遠江守佐瀨種常、大和其子常雄、平八郎等、前後之に戰死す、政宗厚く之を葬れり、後松平氏に至り、一夫の役を免して其墓を掃ひ、荒穢せざらしむ、又別に此三士の爲めに碑を建て、三忠碑と云ふ、

盛備の墓碑

夫枕戈執戟者勇略之譽而帶刀挾矢者威武之業也是平生習弓箭熟干戈得飛騰攻擊之所致而其性之剛强義勇亦與之焉曾聞金上盛備自稱兵庫蘆名氏之支族而仕蘆名家且爲執事與針生某並掌國命其主器之而以客遇矣食邑于金上攝理于津川住于狐戾城是乃以接越羽之藩而蔽西北也爲人質直温厚常嗜和歌風騷文雅豐臣秀吉賞之細川藤孝嘆之天正九年奉其主盛隆之命入洛詣　闕之日任遠江守十月發會津之路於志賀山中有口號同十二年關柴備中之亂舊勇而帥部下之士五百人合戰且與伊達家臣片倉原田接鋒遂破其軍同十三年其主龜王逝老臣四輩議曰以政宗之弟正道爲嗣然則解舊怨令酷和睦驅土無事民庶可安盛備不肯其言而曰不可也宜佐竹義重之弟義廣爲嗣庶臣從其議以盛與之女配焉大繩讃岐刎石駿河二人從義廣而來于會津欲刎老臣四輩而與國事四臣不可二人唧怨謀亂盛備喻之而得無事同十七年義廣與伊達兵士會于摺上原而敗績義廣走黑川後遁常州盛備聚散卒而血戰數回或折刀槍身多被疵發言勵卒而曰蘆名家臣奕世食祿者數千而何無當此時而一人死于國難者矣是可恥之大者也我深懷國士之遇則敢得與賣國降敵者並稱耶授命死節在于今日乃與麾下之士數人自殺而死焉于時天正十七年己丑夏六月十有五日法名號佛照院殿一岳道無居士方今會津城乾金上邑金上寺嘆高名之沒于末世且欲義氣之稱于千載而刻石紀功之志相決而成矣因屬紹介請銘於余故應其求以作之銘

挺然獨立狐戾之城勇猛義氣剛勁忠情臨危守節忍死捐生後世刻石以紀功名

明和二年乙酉季春下澣

國子祭酒朝散大夫林愿子恭父誌

寛政八年丙辰夏四月應覓　　玉潭山維明書

種常の墓碑

佐瀨大和墓在耶麻郡入倉邑邑民以先儒佐瀨常員所作狀謁余文表諸墓按狀君諱種常其先下總人徙會津世爲蘆名氏臣與平田松本富田三氏爲國貴族天正十七年三浦盛國叛降于長井伊達政宗率兵入于猪苗代蘆名義廣帥師戰于磨上原敗績出奔常陸君與其嗣子平八郎常雄死之實六月五日也嗟夫平居無事則保祿位享貴富及國亡君辱則崩角稽首唯恐送款之後也自古賣國之臣曾然視君父子之執干戈衛社稷繼之以死其輕重何如哉

文化二年十月　安嚴識

常雄の墓碑

耶麻郡落合村有佐瀨平八郎常雄墓邑民建石於其側請勒文於府府使鱗祀其事鱗雖不敏以文辭爲職義不得辭謹按常雄蘆名世臣富田美作某之子其察佐瀨大和種常養爲子天正中伊達氏來入猪苗代也蘆名侯帥兵戰摺上原常雄父子從其役及侯敗其父種常既戰死追兵益急常雄見侯危抽腸濺血自奮勵敗卒入敵軍斬首數級遂解侯圍身被數十創氣息將絕從者負之遁至此所遂殞嗚呼此役也蘆名家之大事及諸卒奔散雖身在顯列爲世所識者或走或獲而知耻殉難確乎不可拔者金上遠江守盛備佐瀨父子頹僅不過數人耳宜乎距今殆二百年邑民談其事至慷慨扼腕流涕不可忍也唯惜當時國邦鼎沸不傳其詳乃閱卿野私記僅撰次其事者如斯

文化二年乙丑秋七月　潛園安鱗謹識

三忠碑

三忠號謂金上盛備佐瀨種常常雄所云疾風知勁草板蕩識誠臣若三士是也猪苗代盛國以邑叛納伊達政宗也蘆名義廣自將討之天正十七年六月五日戰于磨上原師敗績出走常陸初龜王天無嗣國相富田平田等議與政宗和請其弟某爲後盛備與沼澤出雲等不可曰近年彼之與我交際如何而今欲主其弟不如迎佐竹義重第二子義廣既而國相與僚大細諏岐刻石駿河爭權亂將作盛備慰諭而止政宗乘此釁所以有是役也及戰富田將監爲先鋒乘風擊之盛國走片倉景綱亦敗獲太郎丸掃部俄而風反伊達成實白石宗實又詭攻觀者觀者走後軍隨而亂矣義廣帥麾下進當政宗會叛者燒日橋而絕歸路是以我師大潰種常常雄死之盛備慷慨曰我國之大臣不與社稷俱存亡何而目立于天下哉遂赴敵而死是日微此三士義廣殆不免盛備才兼文武元老宿將國人賴之死之日知與不知莫不流涕政宗亦曰盛備僉爵任遠江守不可弗禮厚葬之種常稱大和常雄稱平八郎時年十六一家殉難我公讀史至此歎息每高三士節今茲七月過其墳賦國雅吊之三墳異所今建石於此併表之　公親簽額命臣泰紀其事噫今死而有知三士豈不感戴德於地下哉抑

亦足以興起士氣矣謹換銘以　公國雅曰度幾河制仁都容記孔左巴遠芝累德夷
府浮流古登於茂裴以都盧不留逋介

嘉永三年庚戌十二月

高津泰撰　山内香巢唐顔真卿書

義廣の敗軍

義廣走つて日橋川（或は新橋に作る）の橋に至る、橋は已に敵盛國の燒斷する所となりしを以て、是より西に下り、堂島の橋を越え、僅かに免れて城に入る、此役蘆名の兵戰死するもの千五百餘騎、日橋の橋落ちて溺死するもの五百餘騎なり、政宗亦兵を收めて猪苗代に歸れり、（景綱隊旗を奪はれたりしかば、其臣佐藤綱六、我安孫彦之丞を擊つて、陣螺を奪ひ、以て報となす螺は蘆名氏の名器なり、）

政宗三橋城に入る

明日政宗駒形山に軍す、鹽川、三橋、金川の諸城兵、皆黑川城に入る、政宗黑川城を攻めんと欲す、然れども城兵尙多きを以て、還つて三橋城に入り、近傍の土民を撫す、三橋城は、蘆名の連枝、加納盛時の子孫なる、三橋越中盛友の守りし所なり、時に原田左馬介檜原口より來り會せり、初め檜原口は、伊南久川の城主、河原田盛次之を守りたりしが、磨上原戰急なりと聞き、赴き援ひしも、義廣已に黑川に退きたるを以て、去つて中荒井に陣せり、政宗佐竹岩城等の兵、仙道を侵して事急なりと聞き、先つ成實をして赴き援はしめ、將に自ら往かんとす、時に蘆名の世臣、富田美作、平田左京、同周防、志を翻して伊達氏に降らんと欲し、政宗に請ふて曰く、若し臣の罪を宥るし、臣が邑を復さば、城を以て降らん、と政宗之を許せり、城兵之を聞き、或は逃亡し、或は降れり、義廣困蹙し、遂に城を出て、常陸佐竹に赴く、三橋越中、澁川助右衞門、富田將監、中目式部、沼澤實通、二本松梅王、同七郎等、二十餘人之に從ふ、將監、從者星備中をして、闇川橋を絕たしめ、蘆の原越を經て、十一日一同白川に到り、居ること數日、遂に常陸に入り、佐竹氏に依り江戸崎に居る、（義廣後名を盛重と改む、慶長五年德川家康、上杉景勝を伐んとて小山にあり、此時盛重も兵を出して會津に向ひしと見えて家康の答書蘆名古文書に載せたり、佐竹氏御川氏のため秋田に封を移さるゝや、盛重も亦秋田に至りて卒す、）

富田平田等降る

義廣黑川を退く

會津の臣和せず

初め義廣の會津に入るや、大繩讃岐、刎石駿河、付家老として從ひ來り、政權を執れるを以て、平田富田等、之が爲め已れの勢、漸く昔日の如くならざるより、常に之等と和せず、且義廣を主に戴くは、固より本意にあらざりし故に、忠を忘れ義を輕んじ、此逆意をなす、嗟、

政宗黑川城に入る

是に於て、政宗黑川城に入り、里正亭長を召し、戶籍を正し、租稅を平かにし、有功を賞す、猪苗代盛國、舊封を併せて三百貫を與へらる、

盛國の增對

盛國其加封の少なきを以て、先に約せし如く、猪苗代及北方の半を領せんと乞ふ、政宗盟書を出して示す、盟書半字あるなし、盛國憮然として曰く、嗟我誤て半字を脫せり、之れ反を謀りし爲め天譴の致す所ならん今如何ともなし難し、と政宗之を慰め、北方の地若干を加增せり、（盛國の叛くや、子盛胤切に之を諫めて逐はる、磨上原の戰義廣に從ひ、大に勇戰せしが、父盛國の旗進むを見るや、退きて他の伊達軍に突入し、重傷を負ふて橫澤に歸へる、義廣走りし後は、伊達氏、蒲生氏にも仕へず耶摩郡內野村に閉居して死せり、盛國は政宗會津を收められし後從ひて長井に至り、遂に仙臺に至ると云ふ、）

同盟の諸侯師を班す

是より先き、佐竹義重、岩城常隆、相馬義胤、義廣と約せるを以て、兵を率ゐて岩瀨郡に出て、大平門澤の諸城を拔き、遙に義廣に應援せしが、黑川已に陷ると聞き、皆師を班せり、是に於て、政宗會津に據り、勢威奧羽に震ふ、

忠君愛國の精神は國家を保持するの基なり

夫れ一國を保持せんとするには、忠君愛國の精神なかる可からず、敵愾の心慷慨の氣なかるべからず、然り而して此義勇の精神を有し、此凜然たる氣象を備へ、臣民一致し一塊となり、合力戮心、以て外敵を禦かば、蓋世の英傑來り襲ひ、百万の精兵四面を攻むとも、何ぞ其隙に乘じ捷を得るものならんや、然るに黑川城君臣心を隔て、同僚和せず、遂に漁者の利する處となり、一の政宗を禦ぐ能はず、固より異しむに足らざるなり、今日世界列國、相往來するの時、弱肉强食の世に於て、我會津人士たるもの、否、日本國民た

るもの、深思熟考、以て自ら省する所なくして可ならんや、

第三編　伊達氏

第一章　政宗の先代

大織冠鎌足
藤原魚名
中納言山陰

伊達氏は、大織冠鎌足の後裔、阿部大臣藤原魚名より出つ、魚名の玄孫を中納言山陰と云ひ、山陰の後六世を肥前守實宗と云ひ、其子を下野守秀宗、秀宗の子を助宗、助宗の子を光隆、光隆の子を藏人朝宗と云ふ、朝宗の母は源爲義の女なるを以て、源頼朝に仕へ、常陸國眞壁郡伊佐莊中村に居る、故に氏を伊佐或は中村と稱し、常陸介に任せらる、子有宗早世せしを以て、光隆の弟重宗の子を嗣となす、之を宗村と云ふ、宗村亦常陸介に任せらる、文治五年、頼朝泰衡を征するとき其軍に從ひ、伊達郡澤原に於て佐藤元治と血戰せり、此時弟爲重、資綱、爲家、皆傷きしが、宗村奮鬪遂に之に克ち、元治以下十八將を斬り、其首を厚樫山上に梟せり、其功を以て

朝宗常陸に居る
有宗早世
宗村始めて伊達氏と稱す

義廣粟野氏と稱す

伊達信夫の二郡を領し、伊達氏と稱す、後薙髮して念西と號す、伊達便覽、藩祖實錄には、念西は朝宗の號なりと云ひ、四家合考、伊達家譜、日本外史補には、宗村薙髮せし號なりと云ふ、今四家合考等に從ふ、宗村一に爲宗に作るあり、念西の子、義廣、承久の役、北條泰時に屬し、家臣原田氏冬をして宇治勢多に戰はしむ、義廣嘗て伊達郡粟野に住す、粟野氏とも云ふ、

政依宗綱

皇后宮太夫となれり、義廣の子、政依、藏人太夫となる、政依の子、宗綱嗣く、宗綱の子、基宗、宮内少輔となる、基宗の子、行宗、陸奥介たり、

基宗行宗

初め行朝と云ふ

行宗の子、宗遠、雄畧あり、彈正大弼となり、元弘の役、父行宗と共に後醍醐天皇の詔を奉して、國司源顯家に從ひて西上し、細川定禪と三井寺に戰ひ克つ、後足利氏の勢盛んなるにも屈せず、節を守て之に抗し、刈田伊具の諸郡を取れり、宗遠の子を政宗と云ふ、大膳大夫たり、武畧あり、宇多、宮城、長井等を畧取す、又騎射に達し、歌詠を善くせり、卒せる時、將軍足利義持、法華經卷及び國歌を與へて其死を悼惜す、詠に曰く、

宗遠の勤王

政宗の武畧及ひ國風

武士のあとこそあらめ敷島の
　道さへたえんことそ悲しき
朽果ぬかさしともなれ言の葉に
　そへてかきやる法のはなふさ

政宗、曾て屋代峠に陣せしときの詠歌を、新續古今勅撰あると聞きて獻ず、其歌に曰く、

山家霧
山あひの霧はさなから海に似て
　浪かときけは松風の音
山家雪
中々に九十九折なる路たえて
　雪にとなりの近き山さと

此時又

かきすつるもしほなりとも此度は
返さてとめよ和歌の浦人

と詠じ共に添へて獻じたり、政宗の子、氏政、兵部少輔となる、應永九年、氏宗、關東管領足利滿兼の暴虐を惡み、遂に兵を構へて赤館城に據る、上杉氏憲來り攻め糧道を絶つ、氏宗困蹙圍を衝て突出し、會津に奔りて山中に匿る、氏宗の子、泰宗、大膳大夫たり、應永二十年、父の遺志を繼ぎ、義故を招集して再び兵を擧げ、其臣懸田定勝播磨を將とし、信夫郡大佛城今の福島に據る、是より先き、新田義治、三國嶺敗績の後、羽州三崎山の麓に匿る、定勝乃ち使を遣はし之を招きて元帥となす、義治年八十餘、白髮長鬚冑を被むり、戰ふ每に衆に先んじて進み、屢足利の軍を破る、此時滿兼の子持氏管領たりしが、畠山義忠に命して之を征せしむ、義忠の先鋒千五百騎三迫に陣す、義治乃ち岩崎平治をして之を偵察せしむ、平治報じて

氏宗父子足利管領と戰ふ

曰く、敵兵申の刻を以て至り布營未だ定まらず、と義治、定勝に謂て曰く、未の刻を過ぎて陣を敵傍に結ばざるは兵の道なり、彼之を知る乎、果して之を知るとせば、豈我の寡を侮るものにあらざらんや、何ぞ逆擊して之を走らしめざる、と定勝之を贊し、叫喊疾く襲ふ、義忠事不意に出で、兵器武具を遺棄して走る、此後屢、會戰せしが、泰宗等終に兵振はず、會津に奔る、時に持氏、上杉氏憲と隙を生じ、駿河に走り、關東大に亂る、泰宗之に乘じて亦兵を擧げ、遂に舊邑を復し、京師に往き、將軍足利義持に謁す、義持之を優待し偏名を賜ふて持宗と改む、持宗の子、成宗、兵部少輔たり、文明年中、陸奥の守護となる、成宗の子、尙宗、大膳大夫となる、尙宗の子、植宗、左京大夫、陸奥の探題と稱し、威一時を蓋ふ、桑折宗保、中野宗時、搆成して尙宗、植宗、相惡ましめ、家臣二派に分れて相戰ふ、後和成る、植宗の子、晴宗、左京大夫たり、曾て岩城重隆の女を娶るを約せし

成宗

尙宗父子不和

晴宗

輝宗

政宗遠祖の名を襲く

政宗田村氏と婚す

を、重隆約に背きて其婚を許さざりしが、其家臣の大和田仲清、志賀閑齋等、説きて之を嫁せしめ、輝宗を生む、輝宗亦大膳大夫となり、最上義光の妹を娶り子を生む、梵天と云ふ、長ずるに及び、輝宗爲めに首服を加へ、命名して遠祖政宗の名を襲がしむ、梵天辭して曰く、我祖英雄絶世なり、今不肖の身にして之を襲く、或は其名を汚すとあらんと、輝宗曰く、汚すと汚さゞると汝の行爲如何にあり、汝自ら之を慎め、以て辭する勿れ、と梵天之に從ふ、岩城の處士、相田康安を聘し、祿三百石を與へて侍講となし、朝夕經書並に兵法を修む、英傑の資實に玆に養はる、三春城主田村清顯、其女を政宗に嫁せしめんと欲す、輝宗喜び群臣に議す、群臣曰く、田村氏隣境の諸侯と協はず、今之と婚を結ばゞ乃ち怨を諸隣に受けん、之を辭するに若かず、と輝宗曰く、清顯諸隣と協はざるは、是諸隣の事を生ぜしものなり、清顯其間に處し未だ一敗せず、其武稱す

政宗初陣

るに足る、以て我兒の婦翁となすべし、と議遂に之に決せり、是に於て、婚約成り、後年に至りて之を迎ふ、

天正二年、相馬義胤、畠山義繼、大内定綱等、兵を合して伊達伊具の近邑を侵掠す、同四年、輝宗、四万の兵を帥ゐ、始めて政宗を從へて長井を發し大森に向ひ、金津城を攻め、三氏を破り、進んで丸森、金山の諸城を陷れ、駒峯城を攻む、城險にして拔けず、乃ち戍を置きて返る、是より伊達氏の勢威益々振ふ、初め宗村伊達に封せられしより十數代、屢々弱を以て强に抗し、百折不撓、東奥黑子の地より漸く四隣を蠶食し、遂に政宗に及び勢威大に加はるに至る、

政宗封を襲き會津を窺ふ

第二章　政宗前記（侵畧時代）

天正十二年、輝宗封を政宗に傳へて老す、政宗時に年十八、長井米澤に居る、是時、蘆名氏會津に據り、二本松、白川、岩城、岩瀨の諸族を

隨へ、威を遠近に震へり、然るに會々蘆名盛隆、其臣大庭某の爲めに弑する所となり、子龜王尙幼にして國內騷擾す、政宗之を聞き陰かに兼併せんとするの志を抱く、

政宗定綱を眛方となす

同年十月、大內定綱、政宗の勢漸く强盛なるを以て降る、初め定綱の父義綱、四本松城主石橋式部大輔尙義に仕へ、四本松は吉良貞家、足利尊氏の命を以て居り、二本松は畠山高國の居りし所にして、共に北畠氏に抗して奥州を鎭せり、後石橋氏吉良氏に代る、石川彈正光昌と尙義を逐ふて其邑を奪ふ、後光昌と隙を生し、光昌は相馬氏の兵を借り、義綱は伊達氏に援を求めて相戰ひ、遂に四本松城主となる、後義綱田村氏に屬し、亦叛きて蘆名氏に從ふ、定綱に至り政宗の其封を繼ぐと聞き來賀す、是に於て、政宗之を留めて一意我に仕へしむ、定綱因て邸宅を請ふて米澤に居る、

政宗定綱の叛せるを以て會津を討つ

同十三年正月、定綱家族を具ひ來らんとて四本松に歸りしが、亦蘆名氏に附す、政宗再三之を招くと雖も終に至らず、却て之を罵る、政宗大に怒り定綱及び會津を擊たんとす、然れども會津は道途險難、且佐竹氏の應援せんことを憂ひ、俄に兵を發せず、先つ之を原田左馬介に謀る、左馬介曰く、臣の部下に平田太郎左衞門と云ふものあり、即ち會津四老の族なり、能く常に臣に服從せり、之をして會津の家臣中不平の徒を偵察せしめ、之を招きて我に內應せしめば、事を成す亦易からん、と政宗之を可とし、太郎左衞門に命じて、密かに松本備中等を降らしむ、五月會津を襲ふて克たず、

政宗仙道を畧す

同年七月、會津、二本松、四本松の兵と仙道に戰ひて克つ、然れども父輝宗敵の謀る所となりて殺さる、閏八月、政宗美作守に任し、從五位下に叙す、

本宮合戰

同年十一月、蘆名の兵、佐竹、岩城、石川の諸氏と共に二本松を援ひしがば、政宗之と本宮、高倉、觀音堂等に戰ふて利あらず、然れども同十四年七月、遂に二本松城を陷れ、八月米澤に歸る、是より先き、

下野の壬生義政、欵を政宗に送る、之れ義政は小田原北條氏の部下にして、北條氏は已に我と好を通ぜるを以てなり、德川氏亦使を遣はして好を締結せり、此時羽柴秀吉聲威諸國に遍かりしかば、政宗使を遣り書を寄せて好を通ず、秀吉答書して具さに上國を征定せるの狀を告ぐ、是歲、政宗左京大夫に遷る、

政宗大崎を攻む

同十五年、大崎城主左衞門督義隆の長臣等、權を爭ひ政宗に欵を通するものあり、同十六年正月、政宗兵を出して大崎を攻む、最上義光（政宗の叔父にして山形の城主、）大崎を援く、是に由て政宗義光と絕つ、

郡山合戰

同年四月、大内定綱、弟重綱を誘ひ來り降る、蘆名義廣之を聞き、佐竹、岩城等の諸氏と、兵を仙道に出して政宗の領地を侵略す、政宗亦長井を發し、杉田に軍し、高倉、窪田、郡山に戰ひしが、八月、佐竹蘆名の諸氏と和し、又最上義光と成く、

政宗諸隣と和す

政宗義廣を破り黑川に居る

同十七年五月、政宗阿子嶋等の諸城を拔き、猪苗代盛國を招き、同年六月四日、猪苗代城に入り、同五日、義廣と磨上原に戰ひて之を破る、偶蘆名氏の藩臣二派に分れ互に徒黨し、長臣富田美作等來つて欵を送る、依て義廣の城を棄てゝ去るに會し、遂に黑川城を取れり、政宗變幻出沒、敢て測るべからざるの技能を以て、撓まず屈せず、能く隣境を畧せり、就中、其會津を奪ふの苦心經營は、實に彼が生涯中最も力を注きたるものなり、

第三章　政宗正記（入城時代）

政宗八葉寺を燒く

天正十七年六月十一日、政宗會津城に入り、河沼郡冬木澤八葉寺を攻めて之を燒く、（八葉寺は空也上人の開基なり、上人は仁明帝第五の皇子常康親王の御子天祿三年九月寂す、）八葉寺の住僧は富田美作の弟にして、兄の伊達氏に降れるを愧ぢ、義を重んじ、命を委して村東の山に據り、壘を築き溝を掘り、以て政宗に抗せり、是に於て、政宗之を攻めて滅す、當時兵燹に罹れるもの此

寺のみならず、他の莊嚴なる神社、佛閣、及び古書、珍寶多く烏有となる、（天寧寺慧日寺等の大伽藍も、即ち此政宗侵入のとき燒け失せたり、）

伊南河原田盛次は、初め磨上原の戰に槍原口を警備せしが、磨上原戰急なりと聞き赴き援ふ、已にして至れば、義廣黑川に退き片倉景綱追ひ至るに遇ひ、乃ち殿戰して退き、敗兵を收めて中荒井に至る、時に義廣黑川城を去ると聞き、亦退きて高田に留まる、是に於て、其臣伊南政信（源介と云ふ）を政宗に遣はし、書を送つて戰を挑む、政宗之を見、將に兵を發して戰はんとす、左右諫めて曰く、彼は小敵死を決して待つ、之と戰はば多く我士卒を傷けん、之を諭して降すに如かず、と政宗之に從ひ、乃ち辭を卑ふして之を招く、盛次肯せずして伊南に歸る、

河原田盛次政宗に從はず

時に橫澤彥三郎（蒼領安積郡橫澤）、生江主膳（蒼領河沼郡青津）、河原田豐前（蒼領河沼郡境野）等、磨上原に敗北して領內に歸り、防禦の準備をなしたれども、義廣去ると聞き皆降る、是より先き、新國上總（蒼領長沼）、長沼盛秀（蒼領田島）も降りぬ、

會津の豪族降る

佐竹、岩瀨、岩城、相馬、石川、白川の諸氏、會津及田村を窺ひ、先きに大平門澤を陷れたる勢に乘じ、進んで我郡山城を攻む、政宗之を患ひ自ら兵を將ゐて郡山を救ひ、伊達成實、白石若狹、平田周防、原田左馬介をして田村を援はしむ、七月四日、政宗、佐竹義重と窪田に戰ひ大に捷ち、斬首二百二十七級、此日、田村の兵亦岩城常隆を破る、

政宗佐竹氏を破る

同月七日、政宗、原田左馬介をして伊北橫田城主山內氏勝を擊たしむ、左馬介築取城を攻めて之を拔く、河原田盛次之を聞き山內氏を援ふ、初め氏勝磨上原の戰に、河沼郡塔寺に至り敗軍の報を聞き、退て居城に據る、是に於て、政宗の攻むる所となれり、

政宗山內氏を攻む

同年十月二十六日、政宗兵を率ゐて岩瀨須賀川城を攻めんと、山二階堂氏亡ぶ

王山に陣し、大内定綱、片倉景綱は雨喚口より、新國上總、白石若狭は八幡口より進ましむ、須賀川城は二階堂氏の居城にして、城主盛義歿後、夫人伊達氏（植宗の女なり）其遺志を繼き、國に臨みて政を聽き、士卒皆威に服し、佐竹、岩城、蘆名等の諸氏と相提携して固く四境を守り、政宗の會津仙道を蹂躪せしにも係はらず、此城尚持して降らざりき、今又政宗來り攻むるに及び、群臣降を勸むれども聽かず、自ら衆を勵し、諸將を指揮し善く防ぐ、已にして親臣守屋筑後志を飜して政宗に内應し、火を放ちて城を燒く、伊達成實又城外長祿寺に火を放ちて之を攻む、是に於て、城中度を失ひ大に敗れ、夫人自殺せんとす、左右之を諫め城を脫せしむ、夫人遂に走りて岩城常隆に依る、此戰に岩城の援兵の將植田但馬、竹貫中務、佐竹の援兵の將武茂左馬介等及ひ兵五百餘討死せり、

會津の諸將皆降る

是に於て、石川（大和守）昭光、白川義親、（結城七郎と云ふ）小荒井隱岐、矢田野伊豆等降り、岩城常隆田村の侵地を返して和を請ひ、下野那須、上野館林の諸城亦内屬を請ふ、當時政宗黑川を府とし、東は田村岩城より、西は越後津川に至り、北は宮城長井を有して海濱に及び、南は白川を過ぎて二毛に至り、其幅員頗る宏濶となれり、因て諸老臣大城池を茲に築き、以て根底を固めんと乞ふ、政宗聽かずして曰く、吾豈此に久く止まらんや、旗を關東に立て順を懷け逆を伐ち衡を天下に爭ふは吾の志なり、然れとも今疆土新に定まり軍用未だ盈たず、故に明春を待つて大擧し、岩城を先鋒として先つ佐竹を屠らん、と、

政宗の雄圖

山内氏秀吉に援を乞ふ

山内氏勝陰かに僧宥尊を伏見に遣はし、石田三成に依つて秀吉に政宗の暴威を征せんを請ふ、而して陽に西方道庵、河口左衞門、布澤上野、野尻兵庫等と政宗に降り、以て秀吉の來征を俟つ、時に政宗其二心あるを疑ひ之を黑川に留めて歸さず、待遇甚た疎な

り、氏勝之を慍り母の病と稱し、猶子高根澤左馬助、横田出羽を質とし、五日の暇を請ふて歸城し、其質の逃げ歸るを待ち遂に兵を擧ぐ、次て三成の返書を得たり、其文に曰く、

態預飛札快然至極候抑去夏以來被對義廣無二御忠功之段賊以無比類候則遂言上候處御感不斜候彌丈夫に水窪大鹽兩城共に可被相拘事專一之旨　御諚候然者北條相背御下知故來月上旬に始家康景勝御人數被差遣三月朔日に有御出勢北條御成敗議定候間其直に黑河へ被成御龍入政宗可被作刎首に落着候然時者今度之儀に候條其元之儀無御油斷事肝要候將た大沼郡伊北地御舍弟大覺助殿身上之事承候條被得心候窺御透令言上重而御朱印相調可進之候左樣之儀に候得共只今雖可相究候其表之儀無御心元候殊に飛脚も急候間返遣候猶井口清右衞門可申越候恐々謹言

正月十三日　　三成　花押

山内刑部太輔殿　御返報

政宗相馬氏を謀る

同十八年正月、政宗、密かに相馬氏の臣、西館玄蕃を招き内應せしむ、玄蕃之を諾せしが、事發覺し挺身して逃れ來る、時に天童甲斐來り屬す、北條氏亦使を遣して好を通じ、共に佐竹を夾み攻めんと乞ふ、同二月、佐竹、大崎の諸氏と戰ふ、

再び山内氏を攻む

同年三月十七日、政宗、大波玄蕃に兵三百を從へ、河口布澤等を嚮導となし、氏勝を伐たしむ、氏勝横田城に據て之を拒ぎ、誑かして敵兵を城口に引き石弩を發して之を打つ、黑川の兵之に觸れて轉死するもの雪の頽するが如し、尋て越後上杉氏の臣甘糟備後、須田大炊助、兵を率ゐて來り氏勝を援ひ、氏勝の弟大覺、德川家康に仕へて駿府にありしが、亦來り氏勝を助け、勢威大に振ふ、十八日氏勝出でゝ玄蕃と布澤に戰ふ、玄蕃奮戰大に勗め、別に奇兵を出して間道を回りて其後を衝かしむ、氏勝前後に敵を受け、路狹く地嶮にして進退度を失ふ、玄蕃勝に乘じて之を敗り前日の恥を雪ぐ、氏勝僅に免れ退きて大鹽、水窪の要害を固め、只見川を隔

て、敵を待つ、此戰に氏勝の將横田出羽、矢澤河内等六十餘騎討死せり、

政宗河原田氏を擊つ

政宗、田島城主長沼盛秀に囑して亦河原田盛次を招く、肯せず、盛秀乃ち政宗に請ひ兵を發して之を擊つ、盛次之を聞き伊南久川城に據りて拒ぐ、盛秀先づ小林城を攻めて之を拔き、城外の高丘に陣を張る、盛次其兵の甚た衆きを覬て曰く、敵城を虛ふし勢を盡して來る、今此釁に乘じて敵城を襲はゞ必ず捷たん、と乃ち枚を啣み間道より潛行し、盛秀の田島城を襲ひ、盛秀の姉なる金井澤氏の妻を擒にせり、盛秀之を聞き驚き馳せ歸れば、盛次已に去りて在らず、是を以て或は怒り或は悔い、遂に黑川に歸陣して之を訴ふ、政宗其敗を憤りて盛秀を譴責す、盛秀大に慙ちて退く、

盛次の謀計

越後の兵伊南伊北を援く

此時越後の援兵三千餘、伊南に來り盛次を援ふ、政宗之を聞き、又盛秀に兵八百を從はしめ往きて之を擊たしむ、盛秀先つ泉田の

伊南合戰

要所を破り、進んで立岩を踰え火を耻風に放つ、盛次久川城を出て進んで立岩に拒ぐ、盛秀別隊を率ゐて間道より直ちに久川に至り、城兵の衆寡を窺ふ、時に城中、唯婦女老幼を留めて將士の防ぐべき者なく、皆愕き懼れて狼狽するのみなり、獨り宮床四郎右衛門の妻膽畧あり、盛次の姉と謀り、衣物を裂きて旌旗となし、之を塀間に建て以て大兵籠城の觀をなす、盛秀之を瞰以爲く、城中大軍を藏す、と逡巡して進まず、已にして急報立岩なる盛次に達しければ、盛次俄に將士と共に馬に鞭つて歸城し、兵を勵まして迎へ戰ふ、盛秀の兵皆靡き百數十人討死し、遂に黑川に走り歸る、然れども盛次永く政宗に敵すべきにあらざれば、家臣主膳入道玄佐を使となし、私かに伏見に遣はし、石田三成に因て秀吉に來援を乞ひしに、秀吉之を諾み、小田原の北條を征伐せし後、必す政宗が暴威を抑ふべし、と玄佐を還へす、盛次大に

盛秀此歲三月卒す、田島御昌寺に墓あり、

政宗秀吉に降を乞ふ

喜び政宗に抗するの決心を固からしむ、而して政宗亦た種々密策を施し、以て盛次の家臣をして多く欵を通ぜしむ、盛次伊南政信をして敵の間諜を捉へて之を知り、其嫌疑の家臣より質を出たさせ、己れの嫡子龜丸十三歳と共に、越後の上杉景勝に送り、而して越後の援兵を請ひて僅かに城を守れり、

同年三月、豊臣秀吉、北條氏政を小田原に討つ、關東震駭し來降せざるものなし、政宗大宰金七をして往て之を覘はしむ、金七還り報して曰く、軍甚た強盛なり、と政宗始めて懼れ山内及び河原田攻撃を中止し、遠前不入齋を小田原に遣はし、德川家康、前田利家等に就き、秀吉に欵を通ぜんと乞ふ、家康、利家等之を承けず、自ら來り降參の實を表はすべし、と不入齋を歸らしむ、政宗嘆じて曰く、小田原陷らば吾事去るべし、百事を廢して行かざるべからす、と將に自ら往て秀吉に謁せんとす、伊達成實說て曰く、客冬豊臣

政宗小田原に行く

秀吉政宗を誚む

氏の東下せんとするや、檄を移して告ぐる所なり、君今にして往く已に晩し、往て辱を受けんよりは坐して之を迎へ、衡を天下に爭ふに若かす、我帶甲十万地の利に據る、何ぞ彼の烏合の衆を恐れんや、と景綱曰く、秀吉匹夫より起り天下に覇たり、德川等の英傑猶且之に從ふ、而して彼れ朝廷を挾んで四方に號令す、苟も之に從はずんば上朝廷に背き奉り、下北條と滅亡を同じくせん、故に其妄舉を用ふべからす、と政宗之に從ひ、同年五月、成實を黑川城の留守として自ら景綱等百騎を率ゐ、高原峠を經下野に入らんとす、然るに道塞がりて通ずるを得ず、南山より黑川に歸り越後信濃を間行し、六月五日、箱根に至り謁を求む、秀吉輙く見ず底倉の山村に留め、陰かに人をして之を窺はしむ、政宗被髪眇目貌甚だ偉なり、秀吉乃ち淺野長政、宮部善正、釋玄以等を以て之を誚めて曰く、我王命を奉じて反を討ず、天下誰か命を聽かざるもの

あらん、然るに汝何故に私に會津を奪ひ數郡を坐食し、未だ嘗て一使を通ぜざるや、蘆名二本松等皆王室に忠にして先君織田氏に好を通ぜり、然るに汝何故に之を滅して其地を掠めたるや、政宗對て曰く、義廣等數々奚疆を侵し、且奚臣大内定綱罪あるを以て之を伐てば、義廣等、佐竹岩城の諸族と共に之を援ひたり、又先人輝宗畠山義繼の殺す所となりしを以て、之か仇を報ぜんとすれば、義廣等亦之を援ひ、而して義廣、相馬義胤、二階堂盛義等と力を合せ、屢僕の岳父田村清顯の領内を侵掠せり、是を以て日夜拒戰幸に之に克つを得たるのみ、且道路閉塞中國の近況を知らざりしが、今殿下此に至るに及び始て天下歸する所あるを知る、と秀吉復長政をして言はしめて曰く、必ず汝が言ふ所の如くならば、速に會津、仙道を致すべし、否らざれば則汝亟に國に還り、城壘を修め、我れ北條氏を滅し、次で汝が國に至り軍馬の間に見るを

秀吉會津仙道を收む

待つべし、と政宗亦對て曰く、臣が死生唯殿下の命のみ、況んや邑土をや、必ず侵地を致さん、と同月廿四日、乃ち謁す、秀吉便服して出て之を勞し、且つ問ひて曰く、卿陸奥にありて幾戰ありや、曰く、三十餘戰、秀吉曰く、是村巷の小鬪のみ、意ふに未だ大兵を部勒するの法を知らざるべし、と此時北條征討未だ了らず、各國の大兵小田原城を圍むこと數重、勢威甚た盛んなり、乃ち政宗を引きて笠懸の高丘に登り、自ら前に在りて指示して曰く、彼れは畿内の軍なり、彼れは阪以西の軍なり、彼れは海道の軍なり、と政宗唯々敢て仰き視るなし、已にして國に歸る、初め秀吉の諸將、之を留めて還さゞるを勸めて曰く、國に就かしむるは猶虎を野に縱つが如きのみ、と秀吉哂ふて曰く、吾寸兵を用ゐずして五十四郡を取る、汝輩の知る所にあらず、と政宗亦人に謂て曰く、關白は天威なり、と七月十八日、國に就く、木村清久、淺野正勝之に從ひ來り會津

政宗會津を退く

城を收む、政宗去つて米澤に移り、伊達、宮城、長井等七十餘万石を食む、

秀吉奥羽を領して會津に至る

是月二十三日、秀吉遂に北條氏を滅ぼし、進んで奥羽を定めんと宇都宮に至る、政宗、南部信直等と之を迎ふ、同年八月、秀吉白川に至り淺野長政、大谷吉隆、石田三成に命じて奥羽の地を檢せしめ、同十日、會津黑川城に入り興德寺を以て廳となす、寺は郭内にあり是に於て、會津、仙道十一郡を蒲生氏郷に、葛西、大崎、膽澤を木村秀俊に賜ひ、氏郷を以て東門の守となさしめ、秀俊之に隷して相應援せしむ、其他結城、田村、石川、山内、河原田等の諸氏は其領地を沒せられ、此諸氏の中には、初より政宗と抗敵し秀吉に欵を通ぜしと雖とも、其封を沒せらるるに至れるは、皆三成が中間にありて私の愛憎に任せ、謀らひたるものなりと云ふ、

秀吉歸洛

岩城、相馬、最上、南部等の諸氏は或は降り或は減封せられ、奥羽悉く定まる、同十四日、秀吉、會津を發し南高原峠を經て歸途に就けり、其高原峠を經し時、道路險惡駕を下りて步行せるを以て、今に此處を大閤下ろしと云ふ、

第四章　政宗後記(退城後)

政宗秀吉の威に屈服す

政宗、多年苦心經營せし陰謀詭計も、今は水泡に歸し、血を灑き骨を露し、以て幾多の生命を睹して、收め獲たる侵畧地を返還し、將に中原を爭ふの本據となさんとせし、屈竟の占領地會津を捨て、勃々たる大鵬の志を抑へて、秀吉の威に屈し、遂に其本國米澤に就く、而して猶伊達、信夫、刈田、柴田、伊具、亘理、名取、宮城、黑川、志田、松山、桃生、深谷等を有して、東北に雄視せしと雖ども、其胸間に欝勃たる英氣は、永く玆に安んずる能はず、天正十八年、木村秀俊虐政を施し、其領内不平の聲紛々たるに際し、陰かに之等の士民を煽動し、各地に蜂起して亂を起さしむ、之れ治平を變じ勢を制し、以て機を窺ひ變に應じて、其鵬翼を張らんの階段を作らんと欲せ

大崎葛西の亂

しなり、時に蒲生氏郷之を鎭撫せんと、兵を率ゐて赴き、政宗に檄を移して來り會せしむ、政宗乃ち陽に之を諾し、陰に叛旗を飜すべきの好機を窺ふ、然れども氏郷固より豪勇忠直、遂に乘すべきの時なく、亂徒速に平定せり、是より先き、氏郷政宗の反を覺り、之を秀吉に告ぐ、是に於て、秀吉、政宗を召す、德川家康亦使を遣はし速に至らんを勸む、時に政宗の夫人田村氏、伏見にありしが、密かに書を政宗に贈る、政宗之を見喜て曰く、誠に坂上將軍の裔なり、と蓋し書中陳する所、當時上國諸侯の形勢を報じ、且秀吉の召喚に因り其去就を決するに、妾斯に在るを以て念となす勿れ、妾は常に匕首を袖中より離さず、變あらば則ち辱を他人に受けざるを期す、と謂へり、政宗遂に入京す、適秀吉清洲に遊獵せしが、此報を聞き、左右を顧みて曰く、政宗速に至れり、叛せしにあらざるべし、と還つて政宗を見、其賊に應ずるの檄文を出して之を按問す、

南部の亂

政宗征韓

政宗切に其僞書なるを陳ず、秀吉深く其罪を問はず、之れ秀吉、兵を海外に出して皇國の威武を輝さんと、胸中に計劃し、今や諸侯に之を謀議せんとして、而して治平日猶淺く未だ兵疲れ國費多端、其協贊を得るや否やを恐るゝの時なれば、政宗一人を抑制せんが爲め、更に事端を起し內地に血を流さんとを厭ふてなり、政宗も亦常に陰險なる手段を用ゐ、事を成さんと欲すと雖とも、其能はざるを察するや、短刀直入、常に快濶なる手段を以て、罪を謝するに猶豫せざるは、其禍を脫する所以なり、秀吉秀俊の領地を收め之を政宗に與へ、羽柴氏を賜ひ侍從兼越前守に任す、而して其伊達、信夫、刈田、亘理、伊具、柴田及長井米澤地方等の地を削りて氏郷に與ふ、次て天正十九年、南部に於て九戶政實亂を起せしかば、秀吉亦氏郷等に命して之を討滅す

文祿元年正月、征韓の役起るや、政宗、屋代景賴、鈴木重信を留守と

の役に從軍す

なし、伊達成實、仝政景等を帥ゐて之に從ふ、初め秀吉、政宗の地は遠境、且亂後未だ幾くならずして其兵猶疲るゝを以て、從軍の定員千五百人となす、然れども政宗三千を以て西上し、秀吉に會す、是に於て、秀吉前田氏を前驅となし、德川氏を之に次せしめ、而して政宗其次たり、政宗の軍其兵甲器械の美に於て最となす、殊に遠藤宗信、原田宗時等の如き、馬上背に丈餘の木刀を負ひ將に地に垂んとす、金鎖を以て之を鞍上に約す、途上觀るもの堵の如し、是より世華侈を稱して伊達風と云ふ、六月、肥前名古耶に達し、航海朝鮮に赴かんと請ふ、允さず、同二年正月、秀吉之を允す、乃ち名古耶に艤し、韓地に渡る、風に阻てられ、四月釜山浦に達し、進んで蔚山を攻め、晉州城を陷れ、斬首七百級、九月、師を班へす、秀吉其武功を賞して感狀を與ふ、

政宗秀次に黨す

仝四年夏、命を以て國に就く、是年、秀吉、甥關白秀次反ありとし之に自盡を命ず、其近臣及び親しきもの亦罪を得たり、政宗變を聞きて西上す、時に政宗、最上義光と共に秀次に黨せりと流言あり、初め政宗、義光等、南部の亂より秀次と親密なり、而して政宗の臣粟野杢助、仕を辭して專ら秀次に事へ寵を得、政宗秀次の邸に詣る毎に、杢助奉事甚た謹み周旋到らざるなく、應對他侯と異る者ありし、秀吉因て人をして政宗を糺問し、遂に之を斥けて其長子秀宗に家を襲かしめんとす、政宗の諸臣之を聞き、大に愕き騷擾甚し、是に於て、至る所、政宗火を京師に縱ち將に豊臣氏と戰はんとす、と喧傳し、人心恟々たり、德川家康之を憂ひ、使を政宗に遣はし、宜しく邸門を開き其他なきの狀を示すべし、と告ぐ、乃ち其言の如くにす、人心稍定まる、時に政宗の臣中島伊勢、湯目民部、秀吉を途に要し、上書して其主の寃を訴ふ、家康亦秀吉に說き、遂に解くるを得たり、

政宗家康と結ぶ

慶長二年、政宗、從四位下右少將に進む、同三年、秀吉薨じ、遺言して子秀頼の長ずるに及ぶ迄、天下の政を德川、前田、上杉、毛利、浮田の五侯に委し、協議以て事を處せしむ、而して德川家康獨り威望あり、之を以て他の四侯等家康と和せず、政宗家康と結び交誼益々深厚なり、

政宗景勝の反に家康を援く

同五年、上杉景勝、會津に兵を起し家康に抗す、家康乃ち檄を諸侯に馳せ、會津を征し、政宗をして其背後に向はしめんと先つ國に就かしむ、政宗敵地を避け上毛より轉して岩城、相馬に出つ、（此時白川白石間は上杉氏の領なり、）相馬氏政宗と舊仇あり、今政宗の過ぐると聞き大に喜び之を擊たんとせしが、其窮迫せるを憐み之を通過せしむ、政宗辛ふして國に還り、屢上杉氏の領地伊達、信夫の諸城を攻む、次て毛利、浮田、島津、小西、石田等の諸侯景勝に應ぜしが、家康擊つて之に克つ、景勝亦降り天下の權遂に家康に歸せり、政宗功を以て

仙臺城

上杉氏の舊封を割き與へられ、六十二万石を食む、同七年、仙臺に城きて居る、之を青葉山城と云ふ、

政宗意を海外に注ぐ

仝十一年、先きに耶蘇教南蠻より入り諸國に行はる、殊に西國及び東北に盛んなり、政宗南蠻を征し我有となさんと欲し、幕府に請ひて支倉六右衞門、松本忠作、西九郎、田中太郎右衞門等の諸士を遣はし、海に航し以太利國羅馬に至り、其形勢を窺はしむ、諸士羅馬王の書及ひ奇貨珍寶を齎らして歸り、且曰く南蠻の風俗柔弱、我之を伐たば猶腐朽を挫くが如くなるべし、と政宗大に喜び其志を成さんと奮發す、偶幕府耶蘇教を嚴禁し、且大船等を造るを禁ず、故に其目的中途にして止む、英雄餘威を海外に洩さんと欲して其成功を見る能はさる、秀吉と同一徹、惜哉、曾て詩を賦して曰く、邪法迷邦唱不終、欲征蠻國未成功、圖南鵬翼何時奮、久待扶搖萬里風、同十三年正月、家康、政宗に松平氏を賜ひ陸奥守と爲す、

政宗大坂の役に功あり

元和元年、大坂の役、敵將後藤基次を擊つて之を破る、功を以て參議に拜す、寛永三年八月從三位に叙し、權中納言に任せらる、同十三年五月、政宗薨す、年七十法號貞山利公と謚す、之を仙臺般若峯に葬り、寺を建て瑞鳳寺と云ふ、時に殉死するもの十有五人、皆其側に葬る、

政宗卒す

第五章　政宗の言行

政宗の幼時

政宗幼にして學を好み射御を能くし、一を聞て十を知るの才智あり、甫めて五歲、嘗て佛寺に出遊し不動の像を見、近臣に問ふて曰く、是何者ぞ、其容貌甚た猛なり、と左右對て曰く、之れはこれ不動明王なり、其容貌は猛なりと雖とも、其心は則ち慈悲にして衆生を救濟するものなり、と政宗曰く、武將たるもの亦宜しく如此くなるべし、と幼時にして尙ほ此心あり、他日精鋭なる士卒を統合して威を四方に張る、偶然にあらざるなり、

政宗大膽危難に當りて風流を事とす

政宗の底倉の山村に滯留するや、茶博士千利休を招き、茶の湯を學ぶ、秀吉之を聞き謂て曰く、政宗は豪傑の士なり、危難の際に當り、心を風流に處し戲玩を事とし、少しも恐怖する所なし、之れ他人の及ぶ能はざる所なり、と、

政宗膽力敵地を通過す

上杉景勝の兵を會津に擧ぐるや、政宗は大阪を發し搦手より會津を攻めんと、晝夜を分たず馳せ下だれり、白川より以北白石に至る迄の仙道街道は、上杉の領地にして道塞がれば、常陸の國を廻り岩城、相馬を過ぎて國に歸らんとす、而して相馬は累代の敵國なりし、尋常の者ならんには一歩も進む可からざるに、滿身皆膽のみの政宗、少しも躊躇せず、僅かに五十騎の兵を率ゐて岩城、相馬の界に來り、先つ使を遣はして曰く、德川家康、上杉謀叛の征伐あり、余は搦手より向ふべき命を奉じて下りたり、然るに仙道

已に塞がりし故に、濱街道に廻り漸く此境に至り、遠路急行士卒盡く疲れぬ、願くは城下に旅館準備の勞を賜へ、本日は兵馬を休養し明日國に入るべし、と相馬義胤大に喜び、左右を顧みて曰く、あはれ天運の盡きぬる政宗かな、伊達は累代兵を交へし國なり、且今は上杉を擊つ一方の將帥なり、我は上杉に與する者なれば、今夜夜襲を謀り鑒にすべし、と民家を旅館となし、政宗主從を迎へ入る、而して家臣を集めて進擊の方畧を議せしむ、此時水谷三郎兵衛と云へる者、遙の末座に在りしが、窮鳥懷に入る時は、獵師も之を殺さずと聞く、政宗程の大將が年來の怨を捨てゝ、我君公を賴み奉るをば、欺きて擊たんとするは、武士の本意に非ず、實に武門の瑕瑾なり、加之彼の領地の界なる駒ヶ峯は城下より僅か三里、此日は未だ未の時を過ぎしのみ、政宗若し歸國せんと思はば黃昏ならざるに達すべきに、僅かの兵を以て此地に留り宿らんと、或は深き謀計なしとも云ふべからず、只我備を全ふして夜を守り、今は無事に歸國せしめ、後日堂々と旗鼓を交へ、以て兩家の勝敗を天運に任す豈可ならずや、と皆之に同意し議乃ち決せり、其夜は旅館の四邊に篝火を焚き、柝を擊ち鐘を鳴らし、夜を守るに嚴重なり、義胤の士政宗の沈着敵國に在りて悠々たるを惡み、深更に至り馬一二頭の鼻綱を切つて放ち、以て政宗を狼狽せしめんとせり、固より事やあらんと相馬の哨兵番卒等が想像せし際なれば、只鼎の沸くが如くに喧擾して恰も夜襲の始まりし如くなり、政宗は侍童に燭を執らせ左の手に刀を提げ幕を絞りて室を出で、殊に沈重の語句を以て、相馬殿の御人やあらんと云ふ、相馬の警衛の士之を聞て出て來る、政宗少しの周章の體なくして曰く、政宗が率ゐる所の士卒等狼藉せしとあらば、願くは鎭撫せられよ、と一言を遺して再び室に歸り寢に就きぬ、翌亦周章

しくは出發せず、巳の刻の頃叮嚀に義胤の許に使を遣はして一禮し、己は靜かに馬に乘り兵を從へ歸途に就けり、相馬にては密かに人をして之を窺はしめたるに、駒ヶ峯の近傍に伊達の兵、山野に滿ちて迎へたり、これ實に政宗の豪膽にあらざれば爲す能はざる所なり、

政宗の機智

政宗の明智

政宗膽畧ありて能く人を籠絡せり、曾て氏鄕、葛西、大崎の亂は政宗の煽動せし所なりと訴ふ、秀吉政宗を召し詰問せんとす、政宗乃ち塗金の磔柱を馬前に立てゝ入京し、死生固より殿下の意に任せり、唯謀反の事に至りては讒口に出てゝ事實あるとなし、と歎願哀訴、遂に免るゝを得たり、

伊達氏關ヶ原の役に於ける向背は實に自家の興廢の別るゝ所なり、然り而して當時天下の諸侯兩端を持し成敗を觀望せしに、獨り政宗率先して德川氏に欵を通ぜしものは、曾て德川氏に受けたる恩惠を忘れざるありとは雖とも、殊に天下の機微を觀察するの明あるに依らずんばあらず、又曾て天下に志を得んとせしも、其成らざるを察し、望を蜻蜓洲に斷ち、武威を海外に及ぼさんと欲せしが如き、其機智雄畧は諸侯中未だ見ざる所なり、其子孫に至るまで東北に睥睨するを得、良に所以ある哉、

政宗秀忠を饗す

寛永年間、政宗、將軍秀忠を其藩邸に招きて饗し、親ら饌を供せんとするや、其臣内藤外記飯器を持して曰く、今茲に毒見をなさん、と、政宗怒て曰く、吾已に老たり、豈復天下に志あらんや、天下に志あるもの二十年前のみ、と此自白に依るも二十年前、彼が中原の鹿を得んとする慘憺たる心事を察すべし、其時秀忠笑ふて外記をして之を謝せしむ、

政宗家光に服す

德川家康の天下を定め、諸侯をして江戸に參覲せしむる毎に、自ら之を送迎し、敢て譜第の諸侯と比せず、客禮を以て待遇せしが、

三代家光に至り、其格を下して譜第と同じくせんと欲し、一日之等の諸侯を會し、諭して曰く、我祖父卿等の功に因て天下を定む、又曾て卿等と肩を比せしとあるの故を以て、卿等を待する頗る禮を加ふ、家光に至ては襁褓より將軍の家に生れ、今は其嗣をうけて職を汚し、固より前將軍と異なるものあり、故に今より君臣の禮を執り譜第の諸侯と同ふすべし、若し之に服するの心なくんば三年の暇を與へん、宜しく國に就き熟思して去就を決せよ、と此時、獨り政宗進んで曰く、諸侯誰か命に背くものあらん、若し背くものあらば政宗前驅之を滅せん、と列座の諸侯皆悚惶命を聽く、次で家光内廳に諸侯を延き、手から佩刀を與ふ、是れより幕府の威權益々盛んなり、政宗德川氏の勢力滔々として當るべからざるを察するや、既往の野心を舍てゝ衆に率先して此言をなし、以て大勢を定む、其果斷明察、他人の及ばざる所、之れ子孫に至る迄德川氏に優待せらるゝ所以なり、

政宗の豪放

政宗豪放にして物に拘らず、或は龍虎の勢を以て脫兎の如くに進むとあり、或は疾風の如くにして退き、唯々として處女の如きとあり、而して臆せしにあらず、怯なるにあらず、洒々落々として餘裕あるものあり、其豐臣氏德川氏に對して敬意を存せりと雖とも、全く心服して謹嚴に忠直に臣事せしにはあらざるなり、實に一種特色の偉人なりき、嘗て秀吉諸侯に命じて城を木幡に營む、此時政宗御坐船を造り之を秀吉に獻ず、秀吉喜び佩刀を與へて謝せり、適秀吉其船に乘じて土木を巡視す、政宗出でゝ謁す、秀吉戲に侍臣に謂て曰く、我刀政宗の竊む所となる、速に之を收めよ、と侍臣驚き、趨りて政宗に逼る、政宗忽然身を躍らし、疾く遁るると半町餘、秀吉之を見て曰く、佳盜なり追ふに及ばず、と一笑して罷む、

佳盜政宗

政宗大柿を得

秀吉嘗て柿を器に盛り、手から諸侯に賜ふて曰く、政宗は事を好む他人と異なり、宜しく大柿を擇んで之に與ふべし、と一柿を示して曰く、此外を除きて更に大なるものなし、と之を與ふ、當時英雄の會合、物に拘泥せざると斯の如し、

政宗の木刀

又曾て家光、政宗を召して酒を賜ふ、政宗大醉、伏して睡り殆んど前後を忘る、坐右に佩刀あり、密かに之れを見れば木刀なりし、又土井利勝の饗宴に招かれ歸途其家人に送らる、政宗大醉して之を知らず、中途漸く醒めて之を覺り、其家人を輔側によびよせて突然刀を拔き其面上に示す、家人驚倒す、政宗徐に曰く、これ良刀なり汝に與へんと、

政宗將軍に禮せず

又曾て江戸に赴き千住を過ぐ、途上偶將軍遊獵に來らんと喧傳す、政宗の從者上申して曰く、聞く今日將軍遊獵す、と請ふ疾く馳せて其未だ至らざるに及ばん、政宗聽かず、故に徐々として行く、

政宗の寛宏

已にして將軍鷹を臂にし、獨り隴畝の間に立ち從臣未た來り集まらず、時に政宗輿に在りしが見ざるまねして過ぐ、後日將軍に城中に謁す、將軍曰く、先きの日吾鷹を千住に放てり、卿何ぞ知らざるまねして過ぎしや、政宗對て曰く、臣千住を過ぎし時、唯一男子の鷹を臂にするを見たりしも、未た嘗て殿下を見ざりし、と將軍曰く、是れ即ち吾なり、政宗佯り驚き諫めて曰く、殿下天下の重きに任ず、數々輕出して警衛を待たず、臣不測の變あらんを恐れ殿下の爲め之を危む、と將軍之を納る、將軍は即ち家光なり、

松平隱岐守、嘗て諸侯及び幕府麾下の士を饗す、政宗亦招かれて宴に列り、醉ふて麾下の士兼松又四郎の袴を蹈むと屢々なり、兼松固性急、殊に酒氣を帶ぶ、是に於て、大喝政宗を詰り、其頰りに謝するも聽かず、携ふる所の扇を執りて毆打す、座中の主客大に愕き、二人を左右に隔て、遂に兼松をして室を退かしめたり、政宗亦

悠然座に復し、諸侯と共に能樂を見、更に他意なきものゝ如し、能樂終るや、諸侯及び麾下の士等、此日の上座の來賓なる政宗の前に進み、皆兼松が疎暴を謝す、政宗微笑して曰く、何ぞ謝するに及ばん、余も亦大醉禮を失せり、願くは免るされよ、と又曰く、余は四郎の如きを對手となすものにあらざれば決して憂ふる勿れ、と衆皆大に喜び、四郎に盃を賜はり、再交誼を溫められんとを乞ふ、政宗諾す、當時は未だ人心殺氣を帶びたる頃なれば、滿座の人は亦事の生ぜんとを危み、政宗の傍には永井日向守引添へ、兼松再び暴行なさば之を制せんと身構へたり、又兼松の側には柳生對馬守付き添ひたり、已にして政宗盃を擧げて兼松に與ふ、獻酬輙ありて政宗曾我の謠曲を唱ふれば、四座の能師は之に和し、滿堂再び興を催し、舞ふあり吟ずるあり、歡樂時を移し、終に兼松は政宗に返盃し、主人隱岐守納盃をなし、事なきを得たり、時に邸外に

政宗の雅懷

は此事を聞き、諸家の紋付けたる高張提燈晝の如くなりし、而して巷說紛々として傳はり、曰く、政宗麾下の士に傷けられたり、曰く、兼松某政宗と鬪ふ、と殊に伊達家の士は之を聞き、何ぞ猶豫すべき、裸馬に鞭ち馳せ來る者陸續絶えず、然れども門外に至れば、邸中靜穩にして異變ありしとも見えず、唯謠曲の聲のみ洋々と聞ゆるに、皆意を安んじて歸りたり、政宗此時官中納言にして奥羽中の大侯伯なり、兼松の無禮を許るす、其宏量江海も啻ならず、と云ふべし、

政宗の祖先、皆歌詠を能くす、政宗亦性豪放なりと雖も文雅の心あり、其寵臣名士等の逝く毎に、必らず國歌數首を詠じて之が哀悼の意を表せり、嘗て關路雪といへるにて

さゝすとて誰かは越えん逢坂の
關の戸埋む夜はの白雪

其雅量掬すべきなり、此詠かしこくも後水尾帝の撰び給ひし集外歌仙に入れり、

政宗の仁義

或人政宗が國歌を好むを知り、家隆卿の名歌百首の眞蹟を獻せり、政宗大に喜び愛翫措かざりしに、曾て人の典物とせし品なるとを聞き、他人の家寶なりしものを己れの權威に任せ之を所持するは、心に安んずる能はざる所なり、況んや舊の持主は貧困の爲め典物となし、遂には止を得ず之を舍てたるなりとは、愍むに堪へたりとて、其舊の所有者の所在を搜索し、五金を彼の眞蹟に添へて返付せしと云ふ、

政宗庶政に勤む

政宗意を民事に留め、下を待つ甚た寛裕なり、嘗て曰く、余の遊獵をなす所以のものは、吏胥の勤惰を察し、民間の疾苦を聞かんと欲してなり、と又曰く、國の目附横目附の職を設くるは、本臣下の善惡を知り以て之を賞罰せんが爲めなり、然るに今此職に任ずるもの徒に奸惡を發き、短處を探くるを以て能事となし、未だ一善人を擧げしを聞かず、是豈其職を盡せりと謂ふ可けんや、と、

政宗の英氣

政宗薨ずるの前、數十旬將に江戸に至らんとす、適病發す、曰く、吾死期の遠からざるを知る、將軍に謁して然る後に死なんのみ、と家臣の諫止するも聽かず、遂に出途江戸に着き、病を勉めて登城せり、家光之を慰勞し、侍醫に命じて診察せしむ、既にして病日に革る、家光之を聞き、其邸に臨み親しく病を問ふ、政宗整服端坐、之を見て曰く、丈夫葬上に死す、吾が素志にあらざるなり、恨む所のもの唯是のみ、將軍宜しく祖業を恢宏し以て名を万世に垂るべし、と家光之を慰喩す、後數日遂に薨ぜり、

會津史　卷二終

明治二十八年九月十三日印刷
明治二十八年九月廿九日發行

正價金參拾錢

著者　福島縣平民　佐藤儀八　福島縣若松町大字馬場上五ノ町十六番地
發行者　福島縣平民　池内清治郎　福島縣若松町大字馬場上五ノ町廿二番地
發行者　東京府平民　並木鏡太郎　東京市京橋區鍋地二丁目廿五番地
印刷者　島保藏　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十六番地
印刷所　株式會社　秀英舍第一工場　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

版權所有

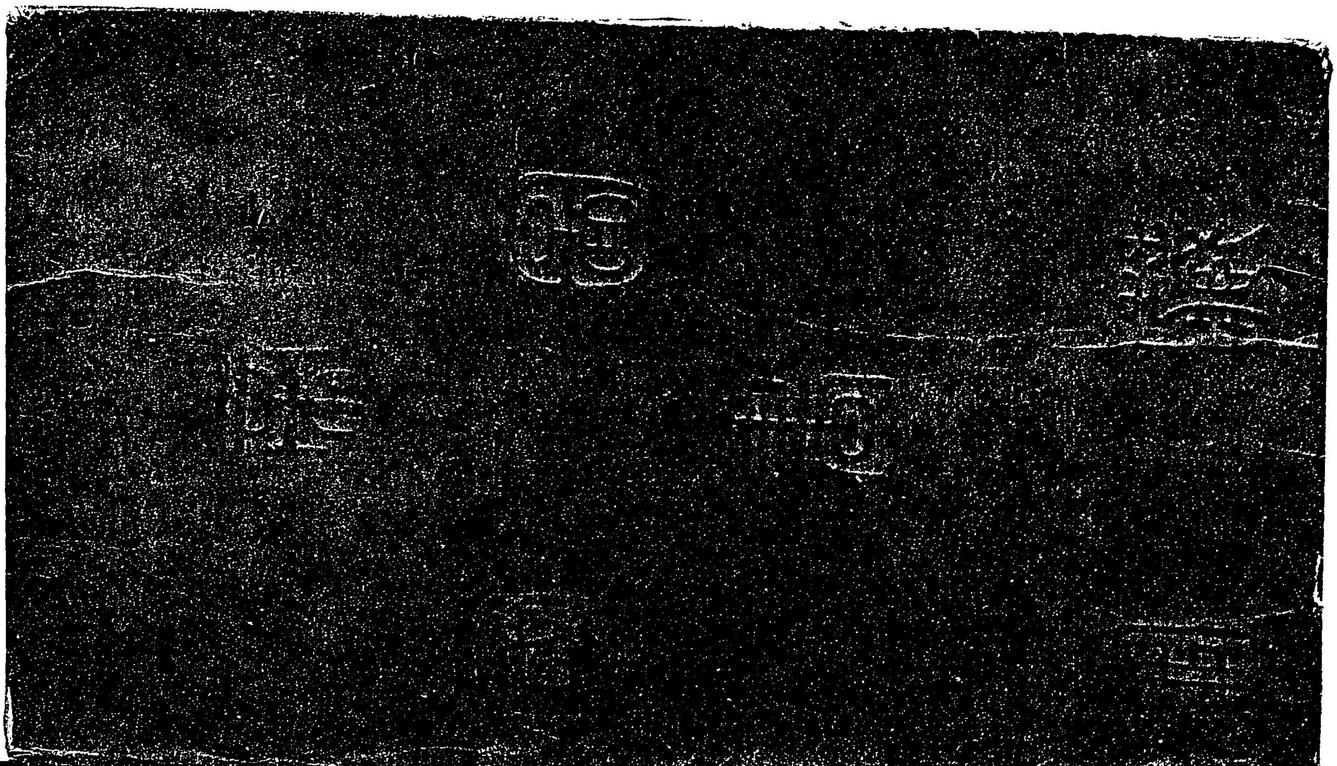
特約大賣捌所

賣捌店

東京神田區表神保町　東京堂
仝　八尾新助
東京日本橋區通ノ壹丁目　大倉孫兵衛
東京京橋區元數寄屋町三丁目　信文堂本店
仝　淺草區茅町二丁目　松成堂
仝　京橋區南紺屋町　小川寅松
岩代若松一ノ町　信文堂
仝　森万作
仝　齋藤八四郎
仝　荒井書店
仝　若松甲賀町　伊藤文華堂
仝　若松大町　田中善平
仝　若松七日町　博盛館

奥羽其他各縣各地ノ書肆

110
E
29



110
Bt
29

023298-001-1

110-29

会津史

佐藤　儀八（旧姓：池内）／著

M28-30

ADC-0175

會津史

110
金
29